



## 東北復興 MHSW にゆうす

3月20日に開催された東日本大震災復興支縁オンライン交流会の様子について、登壇者の方々にあらためて文字にさせていただき、参加できなかった全国の皆様と共有したいと思います。当日は、岩手県支部・宮城県支部・福島県支部の3人が登壇し、これまでについての報告や想いをお話していただきました。今号では、岩手県支部副支部長の土田滋様に振り返っていただき、当日語れなかった想いも語っていただいています。土田様の想いに寄り添い、これから先も私たちに何ができるのか、一緒に考えていきましょう。(東日本大震災復興支援委員会一同)

### 東日本大震災復興支縁オンライン交流会について

岩手県支部 副支部長 土田 滋

オンライン交流会シンポジウムにて東日本大震災当時からの10年を振り返る機会をいただき、改めて東日本大震災復興支援委員会の皆様、宮城県、福島県支部長様はじめ被災地会員の皆様、構成員の皆様、シンポジウムの報告に協力いただいた岩手県内被災地会員の皆様に御礼、感謝申し上げます。

今回、構成員の皆様に改めてご報告する振り返りの機会をいただきましたので、私が伝えなかったことは何であったのだろうと考えてみました。

一つは、東日本大震災当時の記憶を少しでも思い出してもらい、皆様が住んでいる場所で自然災害が起きた時、自分はどうかするのかわらに問う機会にしてほしかったこと。二つ目は、残念なことに人間の記憶は被災者も含め例外なく薄れてしまう現実があるけれども、東日本大震災だけでなく過去の災害から学んだ経験や新たな知見を活かし、構成員の皆様がいるそれぞれの場所で未来の災害支援にどう関与するのか考える機会にしてほしかったということ。それには、日々のソーシャルワークの実践の積み重ねが大切で、それが、いざ災害が起きた時の自身の対応力や力量を高めてくれることにつながるといことでした。

本番の発表では伝えきれない不全感が残り、皆様には大変お聞き苦しい点が多々あったかと反省しておりました。リモートによる開催であったとはいえ、交流会に参加いただいた皆様と対話し分かち合える時間を十分持てなかったことにも悔いが残っておりました。

しかしながら、皆様から頂いたアンケートを読ませていただき、フィードバックを得たことで、構成員の皆様が各々のいる場所で自身の想像力を働かせ、お伝えした内容を咀嚼し、ソーシャルワークや災害支援に対する考えをはじめ東日本大震災から引き継ぐものが何なのか想いを深めていただいたいた時間であったことが分かり、今現在、この役目をお引き受けして良かったと思っています。

オンライン交流会の後、私は全国社会福祉協議会が主催する災害派遣福祉チームのチームリーダー研修を受講したのですが、2021年2月4日時点でDWAT登録者数約5千人、災害福祉支援ネットワーク構築済は42都道府県、DWAT設置済は35府県(活動実績有は13府県)まで普及しているとの説明がありました。しかし、この仕組みは、制度上の整備が進んでも実動性含め未だ産まれたばかりの赤子のような存在で、これからの未来に向けて、この制度を育んでいくのは我々福祉専門職関係者たちであり、東日本大震災から10年が経過しますが、今ようやくスタートラインに立ったばかりなのだ自分自身心新たに思い直しているところです。

この10年を俯瞰してみた時に、一昔前と比べれば、災害支援という領域に対する各専門職種の認識の裾野は広がったと考えていますが、各々が自分事として認識し、実際の活動ができるのかについては不確実であり、精神保健福祉士を含めたソーシャルワーカーがその役割を果たせる社会システムとしては未だ不十分であると感じています。一方で、阪神淡路大震災当時の避難所支援の状況を思い返すと、被災した避難生活者一人一人のニーズを充足し、必要な配慮を出来るだけ整える大切さについては、漸くその必要性やコンセンサスが得られる土台が出来てきたとは言えますし、私たちソーシャルワーカーが横断的役割をとる社会的要請に答える一職種に十分成りうるのだということ、繰り返しになりますが、そのために日頃から自身の専門性を磨きネットワークを作り続けることが大切なのだということを感じているところです。

2011年4月頃だったと思いますが、被災地への支援をどう考えるのかという岩手県内の社会福祉専門職団体の話し合いの中で、「避難所の中で自分たちの役割が必要であることは明らかなのに医療チームから気圧され援助の手を差しのべられないもどかしさ」を訴える声がありました。公式に福祉職が災害現場に入れる仕組みが不十分な中での被災者の叫び(声)でもあったと思います。(裏面に続く)



当時、自分自身も無意識に仕方がないと思っていた面もありましたが、今は DWAT の他、災害支援をチームで運営する仕組みが出来上がりつつあり、今後、どのような質の高い良い制度に仕上げていくのかは我々の活躍如何とも言えるでしょう。私自身、多くの方、全ての人の力にはなれないかもしれませんが、手の届く人たちの力になることで、社会に対する良いメッセージを送ることができるように、これからも微力ながら精進していければと思います。

## 「東日本大震災・被災地障害者作業所等製品販売事業」のお知らせ

当委員会では、前身となる復興支援本部の頃に、当時みやぎ心のケアセンターに勤務されていた構成員の鶴幸一郎氏の呼びかけで被災地事業所の製品を集め、全国の構成員から販売協力の有志を募り、2013年6月に石川県金沢市で開催された全国大会で被災地事業所の製品を販売しました。それ以来、埼玉、福島、山口、大阪、長崎、愛知と毎年各地で開催される全国大会に合わせて会場ブースを設けて物販事業を続けてきました。特に当委員会が協会の常設の委員会に位置づけられてからは「東日本大震災・被災地障害者作業所等製品販売事業」を委員会の主要事業のひとつとして活動を継続してきました。

愛知県名古屋市中で行われた全国大会に続き、北海道札幌市での全国大会（北海道大会）でも物販事業を開催すべく計画を進めておりましたが、昨年度は北海道大会の延期にともない、物販事業も延期せざるを得ませんでした。

その後、委員会で物販事業の在り方や開催方法について議論を重ね、今年度も全国大会に合わせた物販事業の開催について検討してまいりましたが、北海道大会がオンライン開催になることが決まり、例年のように大会参加者が一堂に会する形式ではないため、「委員会のメンバーや販売協力ボランティア達が、全国の構成員の皆様と直接対面し、被災地の事業所にかかわる方々の想いを代弁しながら製品を販売する」という事業の趣旨を十分に果たせないことから、物販事業の形式も大幅な変更が必要になりました。

このような状況の中で、直接対面での製品販売に代わり、オンライン上（例：協会のホームページにある当委員会のページに被災地事業所のホームページのリンクを掲載するなど）で、事業所の広報に協力することや被災地事業所の通信販売可能な製品の情報を構成員の皆様にお知らせしてお買い物をしていただくといった間接的な支援を検討しております。例年と形は変わりますが、全国の構成員の皆様と被災地の想いをつなぐための方法を模索しています。

## 今だから BCP について考えてみましょう

災害はいつ何処に起きるかわかりません。災害の発生時に行うべきことや、災害発生後に各職場を復旧させるために行うべきことを職場内で共有しておく必要があります。災害に備えるために、ほとんどの職場では防災計画が立案され職員間で共有し、避難訓練等が行われていると思います。防災とは、災害発生時に被害を最小限に留めることを中心に考えています。

一方、事業継続計画と呼ばれる BCP (Business Continuity Plan) は災害発生後に事業を継続する点に着目しています。

近年、大規模な自然災害が各地で発生しました。被害を最小限にする防災計画はもちろんだ切ですが、職場の事業を中断させないように、もし中断しても短時間で復旧させるために、災害発生時の対応方針、手順、体制について計画を立てることも大切です。

職場で BCP が立案されていない場合は、この機会に職場の防災計画に目を通し、ハザードマップ等から起こり得る被害を想定し、職場の自分の持ち場で止めてはいけない業務は何か、一時的に止めざるを得ない業務は何か、止めざるを得ない事業は何日後にどの程度で復旧させる必要があるか、そのためにはどの程度の人員やどのような物資が必要か等々考えておきましょう。自分の担当している業務について一度イメージしておくことをお勧めします。BCP を策定されている職場では昨今の災害から被害想定を見直し、そして BCP についてあらためて考えてみましょう。

## 新情報 2021年5月20日から運用開始！

### 警戒レベル4 避難指示で必ず避難！

警戒レベル	状況	住民が取るべき行動	行動を促す情報
5	災害発生又は切迫	命の危険 直ちに安全確保	緊急安全確保
~~~~~ <警戒レベル4までに必ず避難！> ~~~~~			
4	災害のおそれ高い	危険な場所から全員避難	避難指示
3	災害のおそれあり	危険な場所から高齢者等は避難	高齢者等避難
2	気象状況悪化	自らの避難行動を確認	大雨・洪水・高潮注意報 (気象庁)
1	今後気象状況悪化のおそれ	災害への心構えを高める	早期注意情報 (気象庁)

参考：内閣府防災情報のページ 警戒レベルの一覧表（周知・普及啓発用）の指示に従い作成

## 内閣府・都道府県・市区町村のホームページを確認！

新型コロナウイルスが蔓延し様々な問題が露呈されている。他の人に対する想いが東日本大震災時のいわれなき偏見と似ているように感じられる。どうすれば皆が自分のこととして捉えていけるようになるのか、考えていきたい。

(鴻巣)

## 【ご意見・ご感想をお寄せください】

本紙では被災した各地の仲間へのメッセージ及び被災地からの情報発信など、相互交流ができる紙面づくりを目指しております。全国どなたからのメッセージでも構いません。本紙へのご意見・ご感想も大歓迎です。それぞれのお立場からの声をお聞かせください。お寄せいただいたメッセージは、本紙面や本協会ウェブサイトにてご紹介させていただきます(原則として投稿者氏名以外の個人情報に掲載いたしません)。投稿方法は FAX もしくは E-mail: office@jamhsw.or.jp にてお願いいたします。

★題名に「MHSW にゆうすについて」とご記入をお願いいたします。★

第 53 号 2021 年 7 月 15 日発行

編集：公益社団法人日本精神保健福祉士協会 東日本大震災復興支援委員会

発行：公益社団法人日本精神保健福祉士協会

〒160-0015 東京都新宿区大京町 23-3 四谷オーキッドビル 7F TEL. 03-5366-3152 FAX. 03-5366-2993

★URL : <https://www.jamhsw.or.jp/>

★東日本大震災復興支援サイト <https://www.jamhsw.or.jp/ugoki/f-jyoho.html>

